

(論文)

ストレングスに着目した支援過程研究の意味

山口真里*

ストレングスは、利用者がこれまでの生活で培ってきた力や強さを重視する概念であり、今日のソーシャルワークにおいて重視されるようになってきている。本稿では、まずソーシャルワークの歴史から利用者への強さの視点の変遷について整理することをおして今日重視されているストレングスへ着目する意義を明らかにした。また実際の支援事例の考察からは、利用者の変容過程の考察をおしてストレングスに着目した支援展開の重要性について論じた。さらに事例の考察と先行研究からは、現在のエンパワメントや社会構成主義で捉えられているストレングスにかかわる実践枠組みが不明確である現状を指摘した。そのうえでストレングスに着目した支援展開の専門的方法としては、ソーシャルワーク支援過程にストレングスに着目した過程を位置づけて研究を深化させる必要があることを強調した。

1. はじめに

筆者が利用者の力や強さであるストレングスに着目したソーシャルワークに関心を持ったのは、修士論文における末期患者と家族の生活支援方法の研究がきっかけである。論文では、先行研究や事例のヒアリングをおして、末期患者や家族が死というライフイベントをきっかけに生じる多くの身体的・精神的・経済的・社会的な生活問題を抱えることを理解した。そしてそこでの末期患者と家族

は、死を迎えることや家族の一員を失うという出来事に直面することで無力感や喪失感を持ち、これらの生活問題へ対応することが困難な状況に陥っていったのであった。しかしこのような状況のなかでも末期患者と家族のストレングスに着目したソーシャルワーカーは、協働することをおして、彼らが主体となって新しく生活を立て直していく力を獲得するよう支援していたのである。

こうした末期患者と家族のストレングスとは、ソーシャルワーカーとの面接や協働作業を通じて、自らの願望を実現したいという気持ちやこれまでの生活で培ってきた能力や強さの発見や再認識にあると考えられる。そしてこの自らの願望や能力、強さの再認識の過

*やまぐちまり (京都府立大学大学院福祉社会学研究科博士後期課程院生)

程は、本人たちの希望を実現させたり、家族との関係を再構築した生活を始めたりするきっかけとなることが明確になったのである。それゆえソーシャルワーカーが利用者自身のストレングスを支援するための具体的な方法を構築する意味は大きい。

しかしながらこの領域におけるソーシャルワークの研究者は数少ないのが現状である。なぜなら研究者の多くは、どちらかという利用者とのストレングスを前提としたエンパワメントの研究を中心に行っているからである。しかしストレングス研究は、ソーシャルワーク支援過程において利用者が生活問題に直面することでどのような無力感を持ち、どのように対応できなくなっているかを明確にするうえで必要な研究である。すなわちストレングスに着目したソーシャルワーク支援過程は、利用者が生活者としての主体性を回復し、生活を変容していくためのきっかけや介入の入り口となる重要な位置を占めているからである。

そこで本稿では、ソーシャルワーク支援過程におけるストレングスに着目した支援方法を構築する足がかりとして、利用者のストレングスに焦点化した研究の意味について考察していきたい。具体的には、①ソーシャルワークの歴史からストレングスに着目する意味、②エンパワメントなどとの関わりからのストレングスの位置づけ、③利用者のストレングスの構成要素、④ストレングスを展開するうえで必要となる過程の意義、などを文献研究や事例研究をふまえて行っていきたい。

このように本稿では、これら4つの課題を明確にし、さらなるストレングスに着目したソーシャルワーク支援研究の課題を整理してみたい。またこの研究は、今後具体的な方法構築にむけて行われる継続研究の問題提起の

部分として位置づけて論じていくつもりである。

2. ソーシャルワークにおける利用者への視点の変遷

(1) 医学モデルにおける利用者への視点

まずソーシャルワークにおける利用者への視点は、その歴史的背景とともに変遷している。それゆえ利用者への視点を歴史の中で整理することは、利用者が支援過程のなかでどのように位置づけられていたのかを理解するうえで有効であるといえる。さらにこのことは、今日のソーシャルワークで重視される利用者中心の支援展開という点で、従来の問題点を指摘し、利用者のストレングスに着目する視点の意義を考察することにもつながってくるのである。そこでここでは、ソーシャルワーク支援方法を包括する医学モデルや生活モデル、あるいは比較的新しい流れであるエンパワメント概念を取り上げ、利用者の強さに着目する視点の変遷を考察していきたい。

まず医学モデルの歴史は、リッチモンド (Richmond, M. E.) の『社会診断』(1917年) や『ソーシャル・ケースワークとは何か』(1922年) によるケースワークの体系化から始まったといえよう。彼女は、『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』のなかで「ソーシャル・ケース・ワークは人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている」と定義している。そしてこの定義からは、当時のソーシャルワークの焦点が利用者の内面にあるパーソナリティにある一方で、彼女がすでに環境も視野に入れながらソーシャルワークを定義していること

が理解できる。

しかしその後1920年代には、第一次世界大戦（1914年～1918年）から帰還した兵士やその家族の心理的ケアのニーズに対応することがソーシャルワーカーに求められるようになった。そしてその結果ソーシャルワークでは、リッチモンドによって体系化された理論にフロイト（Freud, S.）の精神分析理論が導入され、心理療法的なアプローチが発達していったのである。しかしこのアプローチは、ソーシャルワーカーの専門性の不明確な状況も要因となって精神医学への傾倒が顕著となった。そのためリッチモンドによる環境を視野に入れる必要性の指摘にも関わらず、環境への関心は薄れていったのである。またこれらのアプローチの主たる考え方は、問題を個人の中の疾病として捉えたうえでその支援を「診断 - 治療」として位置づけており、後にそれが医学モデルと呼ばれるようになったのである。

しかし医学モデルによる個人の内面に焦点化する支援方法は、ソーシャルワークの専門性や支援効果への疑問の提示や社会問題の多様化に伴い、その限界が指摘されるようになった。このような医学モデルの問題点については、秋山が7点で整理しており²⁾、表1のようにまとめることができる。そして表1をみる限り医学モデルでは、今日利用者と呼ばれる人たちがクライアント（病気を患う人）として位置づけられ、ソーシャルワーカーによる治療を必要とする存在として捉えられていたことやソーシャルワーカー主導で支援が行われていたことが理解できるのであった。

しかしながら医学モデルにおいてもクライアントの能力への視点は、完全に欠如していたわけではない。例えばパールマン（Perlman, H. H.）は、1957年に出版した著

表1 医学モデルの問題点

- | |
|--|
| ①「クライアント=問題を訴える人や通常ではないと判断された人」という定義 |
| ②支援における個人の内面にあるパーソナリティへの焦点化 |
| ③クライアント（病気を患う人）とみなされることによる本人の自己責任、自立、自助などの軽視 |
| ④「問題解決=原因の追求と治療・除去によって可能となる」という前提 |
| ⑤ソーシャルワーカーとクライアントの関係における「治療する者」と「治療を受ける者」というような立場の違い |
| ⑥ソーシャルワーカーによる主導権の保持とクライアントの支援への参加の欠如 |
| ⑦人間のある部分（情緒、心理、無意識、本能、対人関係など）への焦点化による各部分へのアプローチの乱立 |

書のなかでワーカビリティ（workability）という新造語を用い、クライアントの能力を定義づけようと試みている。このワーカビリティとは、「人々や問題解決に取り組む手段にかかわることを可能にする（大なり小なりの努力と効果を伴う）動機づけや能力の組み合わせ」であり、「『働くことのできる能力』と『治療的影響への反応』の両方を意味」³⁾する。しかしワーカビリティ自体は、ソーシャルワーカーによって評価・判断されるクライアントの能力を示しており、ソーシャルワーカーが行う治療としての働きかけに対する反応を重視していた。このことからワーカビリティとは、ソーシャルワーカーと対等な関係を構築することのできるような強さや能力をクライアントに期待するものではなかった。この点でワーカビリティは、利用者とソーシャルワーカーの対等な関係構築を志向しているストレングス概念と決定的な相違点を持っていたのである。

（2）生活モデルにおける利用者への視点

その後1970年代より登場した生活モデルは、個人の欠損に焦点化した医学モデルの限

界と批判から登場してきた考え方である。一般に生活モデルにおける生活理解には、生態学的視座とシステム理論の導入による2つの流れがある。しかし特に生態学的視座を導入した生活モデルは、「問題を病理の反映としてではなく、他人や、者・場所・組織・思考・情報・価値を含む生態系^{エコシステム}の要素の中の相互作用の結果として捉える」⁴⁾ 思考枠組みであると理解されていた。すなわち生活モデルでは、人と環境を包括的に捉えることをとおして、問題が個人の内面に起こるのではなく人と環境の相互作用のなかに生じると捉えるのである。また生態学的視座を導入して生活モデルを提唱したジャーメインとギッターマン (Germain, C. B. & Gitterman, A.) は、生活モデルが①人々の強さや生来の健康推進、継続した成長、潜在能力の解放、②最大限満足のいく状態にするための環境の改良、③人・環境の適合のレベルの向上、の3点⁵⁾を志向していると述べている。この3点からは、生活モデルが環境に対応していく人間の生来持っている強さやその成長・発達を重視していると理解できる。

そしてさらにジャーメインとギッターマンは、生活モデルの鍵となる概念である力量=コンピテンス (competence) という概念⁶⁾を取り上げている。一般にコンピテンスとは、「環境との効果的な相互作用を可能にする人びとの技術や知識、特質などの総体」⁷⁾と定義されている。特にマルシオ (Maluccio, A. N.) は、生態学的視座から捉えたうえでコンピテンスが人-環境間の相互作用の特性であると主張した。また彼は、コンピテンスが個人のもつ特性と環境に影響を与える特性の両方を示す概念であり、その主な構成要素として①能力と技術、②個人の動機づけ、③環境に影響を与える特性が挙げられると論じて

表2 コンピテンスの促進に焦点化したソーシャルワークの特徴

- | |
|---|
| ①人々への人間主義的視点
②交互作用の現象に置き換えた人間の問題の再定義
③コンピテンスの解明としてのアセスメントの再構成
④クライアントと実践者の役割の再定義 (クライアント：資源、ソーシャルワーカー：可能ならしめる者)
⑤クライアントとソーシャルワーカー間の関係の再定義 (相互関係、信頼関係として)
⑥生活過程と生活経験への焦点
⑦環境の活用の強調
⑧クライアントのフィードバックの定期的な活用 |
|---|

いる。さらに彼は、コンピテンスの促進がソーシャルワークの介入において重要な機能であるとして、コンピテンスの促進に焦点化した competence-oriented social work (以下、コンピテンスの促進に焦点化したソーシャルワークとする) を提唱したのである。そしてコンピテンスの促進に焦点化したソーシャルワークの特徴は、表2⁸⁾の8点のようにまとめることができる。この表2は、人と環境を視野に入れた生活モデルを基点にしてコンピテンスを促進するソーシャルワーク支援の前提を示している。特に③コンピテンスの解明としてのアセスメントの再構成、と④クライアントと実践者の役割の再定義、の2点は、コンピテンスへの焦点化とクライアントとソーシャルワーカーが相互に役割を持つ関係に言及しているという点で生活モデルにおけるコンピテンスの促進に焦点化したソーシャルワークの特徴を表している。

このようにソーシャルワークの歴史における生活モデルの意義は、人と環境の相互作用を重視し、利用者の環境へ適応する力までを視野に入れた点にある。しかし生活モデルでは、生態系を見る場合と同様な視点からソーシャルワーカーが利用者を環境の一部として客観的に捉えることを避けられない。このことは、ソーシャルワーカーが利用者の環境へ

の影響力を判断しなければ利用者のコンピテンスを測れないということを示している。またコンピテンスの促進に焦点化したソーシャルワークの特徴からは、ソーシャルワーカーが「可能ならしめる者」として問題解決への変化を起こす主体として捉えられている。その一方で利用者は、「資源」という活用される存在として捉えられていることが理解できる。すなわち20年前までの生活モデルにおける利用者とは、その能力に着目されるようになりながらもまだソーシャルワーカーから支援の主体として捉えられていなかったのである。

(3) エンパワメントにみる利用者への視点

次に比較的近年の生活モデルの流れで利用者への視点を論じるのに欠かせないのはエンパワメント概念である。一般にエンパワメント概念の登場を促したのは、1950年代から1960年代のアメリカで巻き起こった公民権運動であった。またこのような社会的背景からソロモン (Solomon, B. B.) は、1976年の著書でソーシャルワークの支援方法にエンパワメント概念を導入した。このことは、ソーシャルワーク実践研究においてパラダイムの転換を促したといえよう。また彼女は、著書のなかでエンパワメントを「スティグマを負わされている集団の一員であることに基づいて加えられた否定的な評価によって深刻化したパワーの欠如状態の軽減を目指して、ソーシャルワーカーが利用者と共に一連の諸活動に関わっていく過程」⁹⁾と定義づけ、黒人のソーシャルワーク実践方法を模索したのである。その後エンパワメント概念は、女性や障害者、少数民族、AIDS患者など社会的弱者として差別されている人々へのソーシャルワーク実践方法として発展してきた。しかし現

在エンパワメント概念は、和氣が指摘しているように社会構造のなかで抑圧されている人々だけでなく、生活ストレスに対処するすべての当事者に必要とされる過程であるというように認識されるようになっている¹⁰⁾。またエンパワメントは、ソロモンの定義をはじめとして現在までに様々な定義づけがみられている。例えばステイプルズ (Staples, L. H.) は、エンパワメントを「①パワーを得る過程、②パワーを発達させ、獲得する過程、③パワーを促進し、効果的にする過程、④パワーを与え、認める過程」¹¹⁾と定義している。この定義には、利用者が他者や社会に向けて影響を及ぼし変化させる力としてパワー概念を重視し用いている。特にパワーは、ワーカビリティやコンピテンスの概念よりも、利用者が実際に環境を変化させていくという点において利用者の主体性・積極性を重視している概念であると考えられる。

またリー (Lee, J. A. B.) は、サイモン (Simon, B. L.) の「エンパワメントは、内省的活動であり、パワーや自己決定を求める人々によってのみ開始され、持続されることのできる過程である。このエンパワメント過程において他人は、支援し促進することしかできない」¹²⁾という定義を引用し、エンパワメント過程が支援者ではなく利用者主体で行われることを強調している。またリーやマイリーら (Miley, K. K. & O'Melia, M. & Dubois, B.) の先行研究¹³⁾からもエンパワメント過程は、①個人的レベル、②対人関係レベル、③政治的レベルの連動する3つのレベルで展開される。さらにリーは、エンパワメント過程が政治的な関心や動機づけ、能力を高いレベルに到達することで完了する¹⁴⁾と述べている。そこでエンパワメントは、利用者が自ら主体となって社会生活における3つ

のレベル（個人的・対人関係・政治的）でパワーを獲得し、増強する過程であると定義することができる。具体的には、①個人的レベルにおけるストレングスを具体化する過程、②対人関係レベルにおけるパワーの発揮の過程、③政治的レベルにおける集団構成による社会的・政治的・制度的構造へのパワーの行使過程と整理できる。

そして本稿で研究しようとする利用者のストレングスの過程は、上記の3つのレベルのエンパワメント過程に対応して考えるならば、①個人的レベルにおけるストレングスを具体化する過程、から②対人関係レベルにおけるパワーの発揮の過程までにかけての過程展開を考察しようとするものである。すなわちストレングスに着目する過程は、社会改革を起こすことまでを包括するエンパワメント過程に対して、個人のストレングスに着目し、そのストレングスを他者や周りに働きかけていくパワーに変えていくまでの変容過程に焦点を絞っている点でその違いが明確となっている。しかしながら個人のストレングスがソーシャルワーカーの支援によってパワーに変化した後は、結果的にエンパワメントとして

の②対人関係レベルにおけるパワーの発揮の過程、から③政治的レベルにおける集団構成による社会的・政治的・制度的構造へのパワーの行使過程につながってゆくことも考えられる。その意味でストレングスに着目した過程は、エンパワメント過程のきっかけとなる過程とも考えられるのである。

このようにエンパワメントは、ソーシャルワークにおいて利用者主体の支援展開を行う枠組みを提供したという点で非常に意義深い。特にエンパワメントがパワーとともにストレングス視点を導入しているという点は、医学モデルや生活モデルにみられなかった試みである。しかしエンパワメントの実践枠組みについては、まだ課題も多い。例えば中村は、「エンパワーメントがアメリカの民族問題や貧困・障害・差別などのマイノリティ集団と力との関係の中で盛んに主張されたことからみても、個別レベルでの問題解決と社会への権力回復や強化の関連や説明が十分されているとはいえない」¹⁵⁾とエンパワメントの現状について指摘している。また個別レベルについては、エンパワメントの鍵となる概念としてストレングスやパワーという概念が用

表3 利用者の強さへの視点の変遷

モデル・概念	年代	利用者の強さを表す概念	利用者の強さを表す概念の特徴
医学モデル	1910 ～1970前	ワーカビリティ	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルワーカーによって評価・判断されるクライアントの能力 ・ソーシャルワーカーが行う治療としての働きかけに対する反応を重視 ・ソーシャルワーカー主体の概念
生活モデル	1970後 ～1980前	コンピテンス	<ul style="list-style-type: none"> ・人・環境間の相互作用の特性 ・環境に対してどのように適応し、影響を与えているかという点を重視 ・ソーシャルワーカーを利用者のパートナーと位置づけているが、変化を促進する主体はソーシャルワーカーである
エンパワメント概念	1970後 ～現在	パワー、ストレングス	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者自身が実際に環境を変化させていく力 ・利用者がパワーを獲得していく過程や利用者が生活の中で培ってきたストレングスへ着目するストレングス視点を重視 ・利用者主体の概念

いられるが、2つの概念が混同して用いられている現状も存在する。

このようにソーシャルワークの歴史は、ストレングスという概念が登場するまでに多様なモデルや概念を発達させてきたことが理解できる。そしてこれまで論じてきた医学モデルからエンパワメントまでの利用者の強さへの視点の変遷については、表3のように整理することができるのである。

3. 利用者のストレングスに着目した支援展開の意義

(1) ソーシャルワークにおけるストレングスへの着目

このように1970年代からのソーシャルワークは、医学モデルへの批判をとおして、利用者への新しい視点から多様なアプローチを生み出そうとする流れがみられたのであった。この流れのなかには、先述したような生活モデルやエンパワメント概念とともにストレングス視点も含まれている。ストレングス視点そのものは、1982年のカンザス大学社会福祉大学院による重度の精神障害者の強さや健康的な部分に焦点化したケースマネジメントの試みから始まった。そしてサリービー(Saleebey, D.)は、ストレングス視点の必要不可欠な概念としてエンパワメントを挙げ、エンパワメントの資源や手段を発見し拡大させていく支援過程や理念にかかわる示唆を重視している¹⁶⁾。

その一方でストレングス視点は、エンパワメントにおいても重要な概念とされている。例えば小松は、エンパワメント・アプローチが健康や強さの側面を重視するストレングス視点に基づく試みと連携し、補強し合いなが

ら発達していることを指摘している¹⁷⁾。さらにカウガーら(Cowger, C. D. & Snively, C. A.)は、利用者の力や強さと表現されるストレングスを「エンパワメントのための燃料やエネルギー」¹⁸⁾として重視している。また小松によるとマイリーらは、「強さ志向の視点」(ストレングス視点)を「エンパワメント・アプローチを用いるソーシャルワーカーにとって重要な準拠枠」¹⁹⁾であると位置づけている。このように利用者の力や強さへ着目するストレングス視点は、利用者が主体的に力を獲得・増強する過程の促進を行うエンパワメント・アプローチの基盤としても重視されてきたのであった。

またストレングス視点にかかわるソーシャルワークのもう1つの流れは、社会構成主義の考え方にみられる。ストレングス視点には、利用者の日常で培われてきた主観的な生活世界を理解することで利用者中心のソーシャルワーク支援を展開しようとする点に特徴がある。これは、狭間の「ストレングス視点は(ワーカーの)専門的知識と同等にクライアントの日常知を重視している」²⁰⁾という指摘からも理解できる。すなわちここでは、利用者が自分の生活世界を知る専門家であることが強調され、そのうえでソーシャルワーカーと真に対等な関係を目指すために必要な視点としてストレングス視点があると考えられている。こうしたストレングス視点の考え方には、社会構成主義の「私たちが世界をありのままに把握するのではなく、自分自身の知識に基づいた枠組みによって把握している」²¹⁾という考え方も包含されている。そこでは、利用者の生活を理解するために利用者の認識しているストーリーを理解することが前提となっているのである。

このようにストレングス視点は、まだ歴史

も浅くこの支援に基づく支援展開の試みがいまだ発展途上にある。またストレングス視点自体は、ソーシャルワークの流れの中で重視されつつも、その位置づけが不明確な状況は否めない。しかしながらストレングス視点の枠組みについては、まだ確立されていない現状がある一方で、利用者の固有の生活世界を重視するストレングスに着目することを示唆した意義は大きい。

またここでのストレングス視点は、ソーシャルワークにおけるエンパワメントや社会構成主義の流れのなかで登場してきた考え方を指しており、筆者が提示しているストレングスへの着目とは言葉を区別して用いている。そして今後提示するストレングスに着目する過程は、エンパワメントや社会構成主義の先行研究をふまえながらも、ストレングスを具体化しソーシャルワーク支援過程のなかにその過程を位置づけることをとおして独自に確立していきたいと考えている。そこでここでは、筆者が着目するストレングス自体について考察していきたい。

まずストレングスは、狭間によると「個人や集団、またコミュニティなどが潜在的に保持する総合的な力のようなもの」²²⁾と定義されている。またサリービーは、ストレングスに共通する特徴として「能力 (capacities)、資源 (resources)、強み (assets)」²³⁾という表現を挙げている。

このような先行研究からストレングスをまとめると、日常生活で培われ、蓄積される総合的な力と理解できる。しかしまだそれは、抽象的な表現にとどまっていると思われる。そこでここでは、試案の段階ではあるが、ストレングスの構造の具体化を試みるためにストレングスを利用者固有の生活を営む原動力と位置づけ、その構成要素をストレングスの

表4 スtrenグスの構造の具体化

価値 ①願望・欲求・希望を持っていることや、それを叶えようとしていること ②感情(愛情やつながりなど)を持っていることや、それを高めていること ③責任感を持っていることや、それを持続させていること ④プライドを持っていることや、それを持続させていること ⑤自信を持っていることや、それを持続させていること ⑥強みを持っていることや、それを持続させていること
知識 ①知識を持っていることや、それを獲得・吸収していること ②才能を持っていることや、それを開花させていること
方策 ①資源を持っていることや、それを獲得していること ②意欲を持っていることや、それを向上させていること
方法 ①能力を持っていることや、それを発達させていること ②技術を持っていることや、それを向上させていること

特徴的な部分に基づいて表4のように価値・知識・方策・方法に分類して整理してみた。一般に価値・知識・方策・方法は、ソーシャルワーク実践の構成要素と理解されている。しかし抽象的な表現をされているストレングスをその構成要素に基づいて分類・考察することは、ソーシャルワーク実践の専門的方法としてストレングスに着目した支援過程を構築するうえで、その過程展開を促す方法を示唆すると考えられる。

表4に若干の解説を加えると利用者は、生活の営みをとおして表4のような項目のストレングスをもっている。そして利用者は、実際に生活を営む際に価値・知識・方策・方法のストレングスを組み合わせることをとおして他者や資源に働きかけるパワーへと変容さ

せ、自身の生活を自分のニーズに応じた状態にしていると考えられる。しかし生活問題を抱えた利用者は、問題に直面し、それを解決できないことで今までの問題に対応してきた力や強さが自分にあること(=ストレングス)を意識できない状態にある。あるいは、今までに対応したことの無い問題に直面することで、自身のストレングスをどのように組み合わせればよいのか混乱している状態にあると考えられる。

そこでソーシャルワーク支援では、ソーシャルワーカーが利用者との面接をとおしてこのようなストレングスに気づき、利用者と協働してストレングスに着目する過程が利用者の抱える生活問題を解決していき、ニーズに沿った利用者中心の支援展開のきっかけとなると考えられるのである。

(2) 支援の実際に見る利用者のストレングスへの着目

次にソーシャルワークの実際においてストレングスに着目するということがどのようなことなのかを「墓参りに行くまで死ねない」²⁴⁾という事例から明らかにしてみたい。

(a) 事例「墓参りに行くまで死ねない」の概要

Aさん(75歳)は、妻に先立たれた後、K市で単身生活をしてきた。しかしAさんは、震災に遭ったことがきっかけで生活に不便を感じるようになっていった。そこでAさんは、心配した長男に呼び寄せられ一旦同居することにしたが、長男家族との折り合いが悪く再び単身生活をするようになった。このような状況を危惧した長女は、Aさんを自分の住むT市に呼び寄せた。そしてAさんは、長女の家の近くにあるケアハウスで生活することに

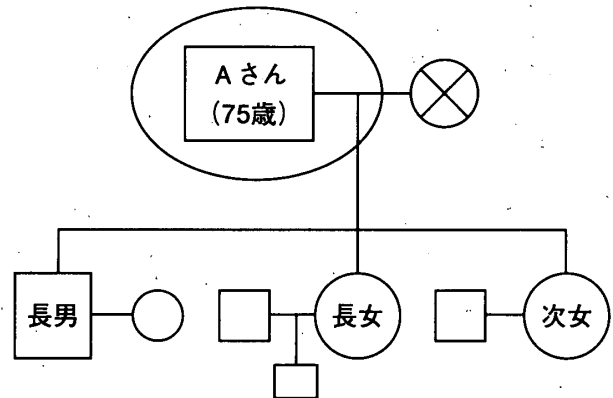


図1 Aさんの家族関係図

なったのである(図1)。

ケアハウスに住み始めた当初のAさんは、他の入所者についてよく愚痴を言っていた。しかし2~3年後には、Aさんもようやくケアハウスにも住み慣れてきたにも関わらず、多発性脳梗塞で倒れ、B病院への入退院を繰り返すようになったのであった。その後Aさんは、歩行訓練を始められるまでに回復しケアハウスに帰ることを希望していた。またB病院のソーシャルワーカーや長女は、Aさんとともに退院へ向けての準備を行っていた。しかしAさんは、検査の結果末期の大腸癌であることが判明し、退院の中止とともにケアハウスへ帰ることもできなくなってしまったのである。このような状況のなかでAさんは、食事もうまくなり、何に対しても意欲を示さなくなった。しかしAさんは、口数も少なくなっていたが、ソーシャルワーカーに会うと唯一「K市にある妻の墓参りに行きたい、墓参りに行くまで死ねない」とだけ述べるようになっていった。

その一方で長女は、「自分が兄弟の反対を押し切ってAさんを呼び寄せたことでAさんが寂しい思いをしているのではないか」とAさんの無気力な状態を自分の責任のように感じていたのであった。そこで長女は、最期を

迎えるAさんのために何かしてあげたいと考え、墓参りを実現させてあげたいと思うようになっていた。しかしAさんの希望を実現するためには、Aさんと息子の間だけでなく長女と兄弟の間の葛藤関係も障碍となっていたのである。

(b) ソーシャルワーカーによるAさんと長女のストレングスへの着目

この支援事例においてソーシャルワーカーは、Aさんの数少ない希望を重視しながら長女の気持ちを受容していった。またソーシャルワーカーは、長女が兄弟との葛藤を乗り越えて連絡調整を行い、墓参りツアーを実現させることを支援していったのである。その支援展開のなかでソーシャルワーカーが着目し

たAさんと長女のストレングスは、表5のようにまとめられる。また表5は、表4に対応してストレングスの内容を示してみたものである。このようにソーシャルワーカーは、Aさんと長女がこれまでの生活のなかで培ってきた能力や感情、願望などが組み合わさったそれぞれのストレングスに着目した。そしてAさんと長女は、それぞれのストレングスを持っていることを意識化する作業をソーシャルワーク支援の協働過程で行い、さらに数種類のストレングスを組み合わせることで墓参りを実現させたのである。

(3) 事例にみる利用者のストレングスに着目した支援展開の意味

本事例では、ソーシャルワーカーがAさん

表5 ソーシャルワーカーが着目したAさんと長女のストレングス

<p>①ソーシャルワーカーが着目したAさんのストレングス</p> <p>(i) 「墓参りに行くまで死ねない」という希望 →妻への思い：「価値—②感情（愛情やつながりなど）を持っていること」 →墓参りをしたいという願望：「価値—①願望・欲求・希望を持っていること」 →墓を守らなければならないという義務感：「価値—③責任感を持っていることや、それを持続させていること」</p> <p>(ii) 「ケアハウスへ戻りたい」という希望 →住み慣れた場所への愛着：「価値—②感情（愛情やつながりなど）を持っていること」 →ケアハウスで過ごしたいという希望：「価値—①願望・欲求・希望を持っていること」</p>
<p>②ソーシャルワーカーが着目した長女のストレングス</p> <p>(i) 父親の希望を叶えたいという思い →父親への愛情：「価値—②感情（愛情やつながりなど）を持っていること」 →父親の希望を叶えたいという思い：「価値—①願望・欲求・希望を持っていること」</p> <p>(ii) 兄弟への思い →兄弟への愛情：「価値—②感情（愛情やつながりなど）を持っていること」 →兄弟という資源：「方策—①資源を持っていることや、それを獲得させていること」</p> <p>(iii) 自宅で塾を経営する能力 →塾の経営力：「方法—①能力を持っていること」 →経営者としての自信：「価値—⑤自信を持っていることや、持続させていること」</p> <p>(iv) 社会資源との交渉能力 →塾の経営のなかで培った交渉能力：「方法—①能力を持っていること」 →交渉に関する知識：「知識—①知識を持っていることや、それを獲得・吸収していること」</p> <p>(v) 目標実現を目指した計画力 →塾の経営のなかで培った計画力：「方法—①能力を持っていること」 →父親の希望を叶えたいという思い：「価値—①願望・欲求・希望を持っていること」</p>
<p>③ソーシャルワーカーが着目したAさんと長女が共有するストレングス</p> <p>(i) 家族との絆 →家族への愛情：「価値—②感情（愛情やつながりなど）を持っていること」 →家族という資源：「方策—①資源を持っていることや、それを獲得させていること」</p>

や長女との面接をとおしてストレングスからパワーまでの変容過程を促進する支援展開をしていった。しかし本稿ではストレングスに焦点化するため、表6のようにストレングスに着目して展開した支援経過におけるAさんと長女、ソーシャルワーカーの間で行われた相互作用の一部²⁵⁾ (事例の前半部分)のみを取り上げている。また本文中の番号は、本章(2)の表5で整理したAさんと長女のストレングスの番号と一致させている。

まずソーシャルワーカーは、Aさんの生活歴を聞くなかで、妻に先立たれたことや震災で被災したこと、長男に見放されたことなど多くの傷ついた体験の情報を認識していった。そしてソーシャルワーカーは、Aさんが

ケアハウスに帰ることができない状況をきっかけとして何に対しても関心を示さず、無気力な状態となっていることを認識したのである。それゆえソーシャルワーカーは、Aさんが意欲を持って最後にやりたいと思うことについて本人から聞きたいと考え、声を掛けている。そしてAさんからは、「①-(i)『墓参りをするまで死ねない』という希望」を聞くことができたのである。またソーシャルワーカーは、Aさんとの会話からそれが「妻の墓を守らねばならない」という義務感を伴う優先順位の高い重要な意味を持つものであることも認識したのである。このようなストレングスへの認識からソーシャルワーカーは、K市への墓参り計画の具体化によってAさん

表6 事例におけるストレングスに着目した支援展開

Aさん	長女	ソーシャルワーカー
※「食べたくないから」と言って食事もあまりとらず、いつも黙っている。		※看護師や医師からもAさんの状態に関する情報を収集。
		「何かやりたいと思うことはありませんか?」
「妻の墓参りがしたい」 「墓参りをするまで死ねない」 ※妻の墓参りへの意欲だけは見られる。	「父が墓参りをしたいと言っています。」	「墓参りのことをより具体化していきましょう。それを目標にしていきたいと思います。」
※妻の墓参りへの意欲だけは見られる。 墓参りの話をすると元気が出る。		
「入院していると益々悪くなるので早く(ケアハウスへ)戻りたい。」	「ケアハウスへ絶対に戻りたい様子です。」	※ケアハウスと連絡調整を行う。
※ケアハウスへ一時外出。	※父親の無気力な様子を見て… 「T市に私が父を呼び寄せたから…。とても反省しています。私がこんなことしたから他の家族とも距離ができてしまったし、悲しんでるんじゃないかって思うんです。」 「この人(Aさん)の人生だからこうなったのも納得できるような気がします。これからは残された時間を何か父のためにやってあげたいと思います。」	※長女の話に傾聴するなかで、Aさんのこれまでの生き方を振り返る機会を作った。

が「希望を実現できる」と実感し、無気力な状態から脱して最期の時間を満足して過ごせるようになるのではないかと考えたのである。またAさんは、末期癌が発見される以前から「①-(ii)『ケアハウスへ戻りたい』という希望」を持っていた。このことを認識していたソーシャルワーカーは、このストレング스에着目しケアハウスの職員たちとの連携をとおしてケアハウスへの外出が下りた際に、Aさんにせめて雰囲気だけでも「住み慣れた所に帰って来ることができた」と感じてもらえるような工夫をしたいと考えたのであった。それは、ケアハウスの職員がAさんの到着時に「お帰りなさい」と玄関で出迎えることであった。それと同時にソーシャルワーカーは、面接のなかでAさんの現在までの経緯を話し合いながら長女とともに状況を整理した。そして長女は、面接をとおして自責や後悔の念を軽減し、現在のAさんの状況を客観的に見ることができるようになったのであった。このことから長女は、「②-(i) 父親の希望を叶えたいという思い」を再確認し、Aさんのために自分のできることをやっという前向きな気持ちになっていくことができたのである。そしてこのことをきっかけにして長女は、墓参りの実現にむけて積極的な姿勢を見せるようになった。また長女は、ソーシャルワーカーとの継続した面接をとおして「③-(i) 家族との絆」についても認識していったのである。

このようにストレング스에着目した支援展開によってAさんや長女は、無気力な状態や葛藤から脱していった。具体的にAさんは、ソーシャルワーカーとのかかわりから「①-(i)『墓参りをするまで死ねない』という希望」を口にすることができた。このことは、長女がAさんの希望を実現させていくきっ

けや原動力となったのであった。また長女は、「②-(ii) 兄弟への思い」や「②-(iv) 社会資源との交渉能力」、「②-(v) 目標実現を目指した計画力」のストレングスを組み合わせることで兄弟や関係機関との連絡調整を行い、家族全員の墓参りツアーを実現したのである。これがいわゆるストレングス概念のなかでいわれるパワーである。またこのパワー発揮を促したのは、「②-(iii) 自宅で塾を経営する能力」に裏付けられた自信であった。その結果彼らは、最期の時間を満足した状態で過ごしたり、家族との良好な関係を回復したりすることで、それぞれの生活を変容させていくことができたのである。

4. ストレング스에着目した支援過程研究の重要性

(1) 利用者のストレング스에着目した過程研究の必要性

このように事例の末期患者と家族は、ストレング스에着目した支援展開をとおして、それぞれが抱えていた生活問題を克服し、生活を変容させていくことができた。もしストレング스에着目した支援過程を展開していなかった場合には、Aさんが自身の希望を話すこともなく、長女がAさんのために葛藤状態にある兄弟に働きかけることもなかったと考えられる。さらにこの家族が、墓参りをきっかけとして新しい関係を築くことはできなかったであろう。すなわち利用者が自身のストレングスを認識できない場合には、利用者が自身を生活問題に対応する主体として捉えることができず、その後の生活を立て直していく意欲を引き出していくことも困難になるのである。そしてその場合のソーシャルワーカー

による支援は、利用者が満足する生活の構築を目標としているにもかかわらず、利用者でなくソーシャルワーカーが主体となる支援展開になってしまい、利用者との協働関係構築を不可能にするのである。それに対してストレング스에 着目した支援過程では、利用者自身が自分の持っている生活を営んできた強さや力を再認識していく。そしてこのことは、利用者が主体となって問題に対応することを促し、ソーシャルワーカーと協働して支援展開を行う主体となることを認識可能にするのである。

しかし実際には、支援経過からも理解できるようにソーシャルワーカーの経験や資質による展開も少なくない。このような支援の実際の課題からは、ストレング스에 着目した支援過程を詳細に研究する必要があることが理解できる。そこでここでは、このような支援の実際をふまえて先行研究によるストレング스에 かわる実践枠組の現状を整理してみたい。

まず現在のストレング스에 視点の実践枠組としては、サリービーが「ストレング스에 視点の原則」²⁶⁾を示し、ストレング스에 の評価を行う実践の前提条件を6点に整理している。またカウガー (Cowger, C. D.) は、「利用者のストレング스에 のアセスメントに関するガイドライン」²⁷⁾を整理し、ストレング스에 をアセスメントする際の基準を提示している。またストレング스에 モデルのケースマネジメントの原則²⁸⁾は、ラップ (Rapp, C. A.) によって6つにまとめられている。しかしこれらの研究は、どれもストレング스에 を捉えるための前提や基準を示したに過ぎず、具体的な支援過程やその展開方法を示したものではない。

またストレング스에 は、現在ソーシャルワークのなかでも新しいエンパワメントや社会構

成主義の流れの中で捉えられている。しかしエンパワメントにおいては、1章(3)節で述べたように、ストレング스에 を具体化する個別レベルでの支援展開方法がまだ明確に提示されていない。また社会構成主義の視点からストレング스에 を理解しようとする試みは、ストレング스에 を「意味の生成力」²⁹⁾として位置づけている。これは、ストレング스에 が個人の自らの世界を意味づける基盤となることを示しているのであるが、その内容についても具体的な支援方法をどのような過程で展開するのかを提示するまでに至っていない。

このような現状は、小松が「ストレング스에 視点」が『現時点において、1つのモデル、パラダイム、理論ではない』³⁰⁾と指摘しているようにストレング스에 にかかわる実践枠組がまだ不明瞭であることを示している。しかしストレング스에 に着目した支援過程は、ソーシャルワークにおいて利用者と協働して支援展開を行い、利用者が主体となって生活を立て直していくことに有効であることはこれまで述べてきたように明白である。そこでストレング스에 に着目した支援過程研究は、ソーシャルワークにおいて急務の課題なのである。

(2) ストレング스에 に着目した支援において過程を重視する意義

すでに述べてきたようにストレング스에 にかかわる実践枠組の現状は、いまだ不明確である。これは、支援における具体的な手続きや手段を展開する過程が明示されていないためであると考えられる。しかし現在のソーシャルワーク支援では、利用者の生活が、生活を構成する要素の相互作用を伴って変容・発達していくエコシステム過程として捉えられるようになってきている。またそれに伴い、過程はソーシャルワークにおいて重視されるよう

になってきているのである。

このことをふまえて太田は、ソーシャルワークにおける過程を「クライアントとソーシャル・ワーカーとが協働し、生活援助を通じた課題解決や、それによる変容・成長を目標に、時間的経過のなかで局面を展開して提供する一連の援助行為の積み上げからなる実践活動であり、その成果はフィードバックされ、さらにクライアント援助に焦点化される科学的かつ専門的な援助システムの流れである」³¹⁾と定義している。また中村は、包括・統合的な過程の特徴³²⁾を5点にまとめている。このことは、ソーシャルワーク自体が生活支援のなかでもその過程をとおして変容・発達していくような利用者の能力や強さを促進していくことに焦点を当ててようになってきたことを示唆している。すなわちソーシャルワーク支援は、過程をとおして生活状況を構成するミクロからマクロまでのシステムやシステム間の相互作用、その時間的経過や変容を視野に入れながら介入するものである。またここでは、ソーシャルワーカーが利用者のストレングスに着目することによって本人が成長・変容し、問題解決を図る過程が展開されなければならない。またこのような過程展開には、変容する個別な生活状況に対応した支援過程で連続した局面展開とそのフィードバックが必要となる。

そして支援過程を構成する局面について太田は、「過程展開パターンの原型として、時間と状況の変化に対応して設定される援助の段階」であり、「固有な役割や機能を行為者に求めることから成り立っている」³³⁾と定義している。このことは、支援過程展開としての専門的方法が各局面で行う実践手続を整理しなければ確立したといえないことを示している。また支援過程を構成する局面研究の現

状については、中村が「一局面を理論的に独立させ技術や技法を考察する方法は、比較的前進してきているが、局面全体やその流れを視野に入れた局面研究は、まだ残されたままである」³⁴⁾と指摘している。しかしながら専門的方法の確立には、支援過程の詳細な分析、すなわち支援過程を構成する局面研究とその全体としての連続性の研究を深化させなければならない。そしてストレングスに着目した支援過程においてもまた過程の全体の検証とともにその局面の詳細な分析が必要不可欠なのである。

(3) ストレングスに着目した支援過程研究の課題

ストレングスに着目した支援過程は、ソーシャルワークの専門的方法として構築するために過程研究とその局面研究を最重要課題としている。またストレングスに着目した支援過程の構築には、ソーシャルワーカーと利用者が協働して利用者のストレングスに着目し、変容させていく詳細な過程とその局面を分析することが必要となる。そして事例考察でも述べてきたようにストレングスは、その構成要素をいくつか組み合わせることで他者や周りへ働きかけていくパワーに変容し、その発揮が可能になると考えられる。それゆえストレングスに着目するということは、そこからパワーへ変容する過程までを考察することに他ならない。

しかし今日のソーシャルワークの中では、ストレングスとパワーが同じ強さや力というような表現で使用されており、混同されている状況もある。そこでまず先行研究からストレングスとパワーに関する定義を表7³⁵⁾のように整理した。この表7でもわかるようにストレングスとパワー概念には、共通点と相

違点が混在していることが指摘できるだろう。若干考察すると共通点としては、下線で示したストレングスとパワーにみられる能力や知識、技術の保持を挙げることができる。また相違点は、下線を引いていない部分である。そしてその違いは、特にパワーの特徴にみられる□部分である。この□部分については、ストレングスよりもより積極的に他者や社会資源に働きかけようとする点においてストレングスと異なる特徴を持っていると指摘できる。

さらに表7によるストレングスとパワーの比較からは、それぞれの特性を抽出することができる。まずストレングスについては、主観性、潜在性、抽象性、経験性というような特性を挙げることができる。そしてこれらの特性からストレングスは、「日常生活で培われ、蓄積される総合的な力」と定義できる。それに対してパワーは、客観性、顕在性、具体性というような特性を挙げることができ、

「目標や対象に向けて焦点化された力」と定義できる。特にパワーは、ストレングスと共通性がある一方で、力を発揮する対象や目標が明確で焦点化されているという相違点がみられる。そのことから、「日常生活で培われ、蓄積される総合的な力」であるストレングスが「目標や対象に向けて焦点化された力」としてのパワーへと変容する過程というように双方の関係性を示すことができると考えられる。

そこで現段階でストレングスからパワーへの変容過程として考えている内容は、図2のようなストレングス-パワー循環過程で示すことができると思われる。これは、利用者がソーシャルワーカーと協働しながら、自らのストレングスを意識化・明確化・焦点化・行動化という過程をとおしてパワーへと変容させ、そのパワー発揮によって力をつけた利用者がまた新たなストレングスを蓄積させていく循環過程を提示するものである。それゆえ

表7 スtrenグスとパワーの比較

ストレングス	パワー
①願望・欲求・希望を持っていることや、それを叶えようとしていること	①必要とするものを「得る」能力
②感情（愛情やつながりなど）を持っていることや、それを高めていること	②他者（人や社会）へ「影響を与える」力
③責任感を持っていることや、それを持続させていること	③資源に「アクセスする」能力
④プライドを持っているということや、それを持続させていること	④物事を「思い通りにする（コントロールする）」ことのできる能力
⑤自信を持っていることや、それを持続させていること	⑤知識を持っていること
⑥強みを持っていることや、それを持続させていること	⑥技能を持っていること
⑦知識を持っていることや、それを獲得・吸収していること	
⑧才能を持っていることや、それを開花させていること	
⑨資源を持っていることや、それを獲得していること	
⑩意欲を持っていることや、それを向上させていること	
⑪能力を持っていることや、それを発達させていること	
⑫技術を持っていることや、それを向上させていること	

今後ソーシャルワークの過程や局面を重視し、その分析研究を行う意義は大きいと考えている。詳細は次の研究で論ずるとして、このようなストレングス・パワー循環過程は、ソーシャルワーク支援の局面展開によって実践可能になると考えられる。そこで今後の課題としては、過程の各局面における①ストレングス・パワー循環過程の段階の整理と精緻化、そして全体としての局面の連続性を強める②過程展開を促進するソーシャルワーカーの具体的技法の分析、の2つの課題を達成し

ていくことが必要である。

5. おわりに

本稿では、これまでソーシャルワーク支援においてストレングスに着目する意義とその過程の重要性について述べてきた。具体的には、①ソーシャルワークの歴史からみる利用者のストレングスへの着目の意義、②事例考察からみたストレングスに着目した支援展開

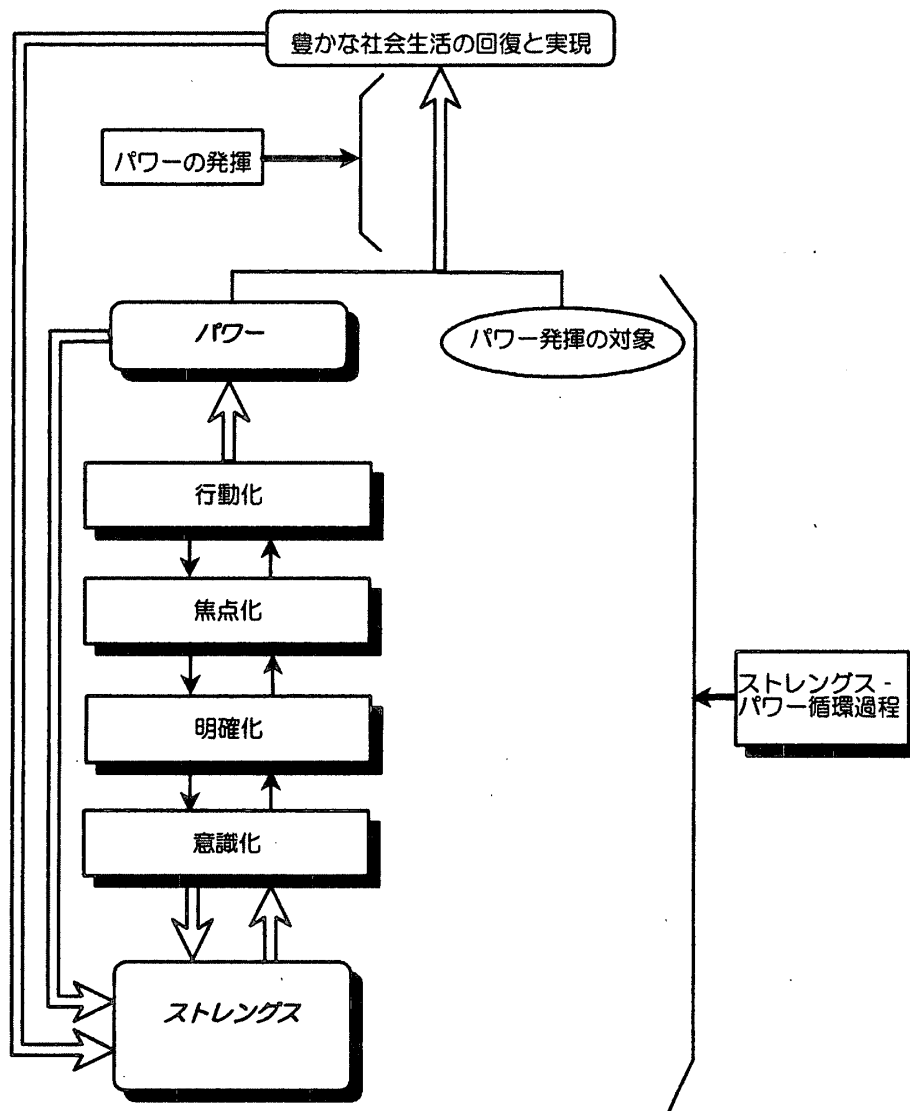


図2 スtrenグス・パワー循環過程

の重要性、③ストレングスにかかわる実践枠組みの現状、④ソーシャルワーク支援過程からストレングスに着目した過程を研究する意義、の4点の考察をとおして、これまでのソーシャルワークにおいて指摘されてこなかったストレングスに着目した支援過程研究の意義について論じてきた。そしてそのなかでは、ストレングスに着目した支援展開が利用者のパワーへと変容していくきっかけになることを強調した。

しかし本稿には、①ストレングスの構成要素の分類方法、②ストレングスとパワーの特性比較からの変容過程の詳細な分析、という2点において課題が残されたままである。そこで今後は、ストレングス概念のさらなる分析とともにストレングスとパワーとの関係性についても継続した研究を行っていきたいと考えている。またこの研究をとおしてストレングスからパワーへの変容過程をストレングス-パワー循環過程と位置づけて提示していきたい。さらにストレングス-パワー循環過程は、ソーシャルワーカーと利用者の協働による循環過程展開のなかで利用者のストレングスの変容を期待するものであり、変容を包含する過程なしには構築できない。したがってストレングス-パワー循環過程を構築するための研究課題としては、この過程をソーシャルワーク支援過程のなかに位置づけ、詳細な分析を行っていきたいと考えている。

<注>

- 1) メアリー・E・リッチモンド著、小松源助訳『ソーシャル・ケースワークとは何か』中央法規出版、1991年、p.57。
- 2) 太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館、1999年、pp.53-54。
- 3) Perlman, H. H., *Social Casework: A Problem-*

- solving Process*, The University of Chicago Press, 1957, p.183; ヘレン・H・パールマン著、松本武子訳『ソーシャル・ケースワーク 問題解決の過程』全国社会福祉協議会、1967年、p.225。
- 4) C・B・ジャーメイン著、小島蓉子編訳『エコロジカル・ソーシャルワーカーカレル・ジャーメイン名論文集一』学苑社、1992年、p.11。
 - 5) Germain, C. B. & Gitterman, A. "Ecological perspective", *In Encyclopedia of Social Work* 19th ed., NASW, 1995, p.821.
 - 6) C・B・ジャーメイン著、小島蓉子編訳、前掲書、pp.192-197。
 - 7) Maluccio, A. N. ed., *Promoting Competence in Clients: A New/Old Approach to Social Work Practice*, The Free Press, 1981, p.ix.
 - 8) *Ibid.*, p.x & pp.10-21.
 - 9) Lee, J. A. B., *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press, 1994, p.13.
 - 10) 和気純子『高齢者を介護する家族—エンパワメント・アプローチの展開にむけて—』川島書店、1998年、p.150。
 - 11) Cox, E. O. & Parsons, R. J., *Empowerment-Oriented Social Work Practice with the Elderly*, Brooks/Cole Publishing Company, 1994, p.18.
 - 12) Lee, J. A. B., *op. cit.*, p.13.
 - 13) 以下の文献を参照した。
 - ・ Lee, J. A. B., *op. cit.*, , pp.23-24.
 - ・ Miley, K. K. & OMelia, M. & Dubois, B., *Generalist Social Work Practice: an empowering approach*, Allyn and Bacon, 2004, pp.85-88.
 - 14) Lee, J. A. B., *op. cit.*, p.24.
 - 15) 中村佐織「ソーシャルワークにおけるエンパワメントの意味—アセスメントとのかかわりから—」『ソーシャルワーク研究』Vol.21 Vo.2、相

- 川書房、1995年、p.53。
- 16) Saleebey, D. ed., *The Strengths Perspective in Social Work Practice* the 3rd edition, Allyn and Bacon, 2002, p.9.
- 17) 小松源助「ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの動向と課題」『ソーシャルワーク研究』Vol.21 No.2、相川書房、1995年、p.6。
- 18) Saleebey, D. ed., *op. cit.*, p.108.
- 19) 小松源助、前掲書、同頁。
- 20) 狭間香代子『社会福祉の援助観 ストレngths視点／社会構成主義／エンパワメント』筒井書房、2001年、p.156。
- 21) 同書、p.98。
- 22) 狭間香代子「エンパワメント・アプローチにおけるストレngths視点の意味」『社会福祉実践理論研究』Vol.9、日本社会福祉実践理論学会、2000年、p.70。
- 23) Saleebey, D. ed., *op. cit.*, p.84.
- 24) 修士論文で使用した事例を加筆修正したものである。
- 25) 事例の後半部分については、2002年度京都府立大学大学院福祉社会学研究科修士論文「ソーシャルワークにおけるホスピス・アプローチの構築—生活へのストレngthsを志向した実践展開—」を参照していただきたい。
- 26) Saleebey, D. ed., *op. cit.*, pp.13-18.
- 27) *Ibid.*, pp.112-115.
- 28) Rapp, C. A., *The Strengths Model: Case Management with People Suffering from Severe and Persistent Mental Illness*, pp.45-54.
- 29) 狭間香代子、前掲書、2001年、p.162。
- 30) 小松源助「ソーシャルワーク実践におけるストレngths視点の特質と課題」『ソーシャルワーク研究』Vol.22 No.1、相川書房、1996年、p.46。
- 31) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房、1992年、p.142
- 32) 中村佐織「ソーシャルワークにおける過程の意義」太田義弘編『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規出版、1999年、p.64; 中村佐織「ジェネラル・ソーシャルワークの展開過程」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館、1999年、p.84。
- 33) 太田義弘・佐藤豊道編『ソーシャルワーク 過程とその展開』海声社、1984年、p.67。
- 34) 中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメント—コンピュータ教育支援ツールの研究—』相川書房、2002年、p.16。
- 35) ストレngthsについては、3 (1) の表4と同様の内容であるが、パワーと同様な表として比較するために表4の分類の部分を削除した形で表記した。